

通り慣れた道路におけるバス乗務員の記憶に関連する要因の検討

松本 真菜子

運転は長期的な経験によってある程度自動化された行動であり、ドライバーは通り慣れた道路を運転しているときのことについて後から正確に思い出すことが実は難しいと言われている。しかし、ドライバーの通り慣れた道路における記憶についての研究はそれほど進んでいない。特に、通り慣れた道路に常設されている物に対する記憶については明らかになっていない部分が多い。そこで本研究では、一時停止標識や無信号横断歩道に対するバス乗務員の記憶について調査し、通り慣れた道路におけるバス乗務員の記憶に関連する要因について様々な観点から検討を行った。

実験Ⅰでは、バスのドライブレコーダ映像の観察と、その映像において運転を担当していたバス乗務員 35 名に対する実験を行った。実験内容は、アンケート、地図を用いた記憶課題、ルート内の 15 地点の事故の危険度を評価するリスク評価課題、フィードバックとインタビューであった。ドライブレコーダからは、一時停止標識設置地点における一時停止行動の有無、無信号横断歩道手前でのブレーキの使用の有無と車両速度を観察した。そして、観察された運転行動や主観的リスクが記憶と関連しているかどうかについて分析を行った。その結果、バス乗務員の運転行動や主観的リスクと一時停止標識や無信号横断歩道に対する記憶の間に有意な関連は見られなかった。しかし、ドライブレコーダの映像観察からは、一時停止行動が個人の中で一貫している傾向があることや、個人の中でも同じ地点を通る際のブレーキの使用方法に一貫性が見られないことを発見することができた。また、実験の最後に行った補足的なインタビューでは、参加者が記憶できていた場所に対する印象を積極的に語る様子が見られた。

そこで実験Ⅱでは、定性的なデータを補強するために、バス乗務員 22 名を対象に実験を行った。実験内容は、アンケート、地図を用いた記憶課題、インタビューであった。実験Ⅱではインタビューを中心に行い、一時停止標識や無信号横断歩道について、記憶できていた理由として思い当たることや、記憶できていた場所と記憶できていなかった場所の印象の違いなどを尋ねた。その結果、一時停止標識については、一時停止標識が設置されている地点で自らが一時停止を確実に実行していることが記憶できていた理由であるという意見が最も多かった。無信号横断歩道については、横断者の存在やその数の多さ、横断歩道周辺の歩行者の存在など、歩行者に関する要因が記憶に関連していることを明らかにすることができた。

このように、本研究では定量的には記憶に関連する要因を発見できなかったものの、定性的な側面からは一時停止標識や無信号横断歩道に対する記憶に関連する可能性のある要因を明らかにすることができた。また、本研究で行ったインタビューでは、参加者が普段の運転を積極的に振り返りながら記憶できていた理由を検討している様子が見られたほか、記憶できていなかった場所における普段の自分の運転に関して気づきを得た様子の参加者が多くいた。これらのことから、地図を用いた記憶課題を行い、自らの記憶が何と関連しているのかを考える時間を設けることは、標識や横断歩道などへの意識を高めるだけでなく、参加者にとって記憶という新たな観点から普段の運転を見つめ直す機会になると考えられ、さらなる安全運転の実施につながる可能性がある。(安全行動学)